

## 哲学における論文読解比較研究

— 2人の哲学者の「思考法」に着目して —

岡田 了祐・福井 駿

本共同研究は、教材研究において学校教師が複数の論文の読解を読み取る現実に即して、2つ以上の複数の論文を取り上げ、その領域における研究=学習の発展を読み取るには、どのように読解すればよいのかを究明するものである。本分担研究は、主に価値領域に関わる哲学研究に焦点を当て、そこから特性の異なる2つのタイプの研究を抽出し、それらを比較しながら、当該分野における研究の発展を読み取るための読解に関して検討を加えた。具体的に対象としたのは、工藤和男『いのちとすまいの倫理学』（晃洋書房、2004年）とスミス、M.著『道徳の中心問題』（榎則章監訳、ナカニシヤ出版、2006年）である。これらは双方とも、人類に突き付けられてきた本質的で解決が困難とも思われる問題に応じて、たち起こった研究である。しかし、両書を「倫理学はなにを生み出せるのか」という視点をもって読解すれば、その研究の在り方は大きく異なることが見いだせる。

上記2つの研究は、その過程における思考のメタレベルに差異が生じていた。工藤の研究は、「我々が行動する際の指針は何か」を追求するものであり、「行動についての思考」であった。一方、スミスの研究は、「我々が行動する際の指針は何か」を追求する研究者の指針は何か」という工藤の研究よりメタレベルを一つ上げたものであり、いわば「思考についての思考」となっていた。メタレベルを上げることによって、表面上現れていた問題をより深く探り、これまで研究の対象外だったさらに深刻な諸問題を露出させ、我々が吟味可能な範囲を広げている。哲学研究の目的を本質的問題への新しいアプローチを創出することであると考えるならば、スミスの研究は、新しい問題を掘りだし、その可能性をより広げるための研究の発展と捉えることができる。

以上の比較考察の結果、哲学研究における読解方法として、探究した結果を読み取ろうとするのではなく、その思考のプロセスを読み取ることによって、その領域における研究=学習の発展を読み取ることが可能になることが示された。

キーワード：真正な実践，論文読解，比較研究，思考，哲学

### **A Comparative Study of Manuscripts on Philosophy: Emphasizing Two Philosophers' "Way of Thinking"**

Ryosuke Okada and Suguru Fukui

School teachers often study multiple academic manuscripts for their research on teaching material. Therefore, our collaborative study reviews the relevant literatures and attempts to clarify the best way to practically connect reading and learning (interpreting) in the relevant field. In this paper, we focus on philosophical studies that predominantly relate to the concept of value. By comparing two books with two different types of research characteristics, we examine the act of reading in relation to the act of learning (interpreting) the subject matter.

The selected books are *Another Bio- and Eco-ethics* (by Kazuo Kudo, published in 2004 by Koyo Shobo) and *The Moral Problem* (by Michael Smith, translated by Noriaki Katagi, published in 2006 by Nakanishiya Shuppan). Both books were written in response to challenges and issues faced by humanity, issues that are believed to be inherently difficult to solve. These two studies can be discussed differently if both are read from the perspective of “what can ethics lead to?”

The two books use different perspectives because they adhere to different meta-cognitive levels. Kudo’s research pursues the question “what are the guidelines for our actions?,” implying “thought about action.” In contrast, Smith’s research asks “what are the guidelines for researchers who pursue the question of ‘what are the guidelines for our actions?’” Thus, Smith’s research promotes “thinking about thinking.” By considering the question from a higher meta-cognitive level, Smith delves deeper beneath the problem’s surface and further exposes serious problems that were previously outside the scope of the study, which eventually helps expand the possible range of what can be examined.

If we believe that the purpose of philosophical research is to create new approaches to tackle essential problems faced by humanity, Smith’s study can be regarded as the development of research that helps uncover new problems and opens the possibility of addressing such problems. Results of our comparative study can allow us to determine that the best way to connect reading and learning (interpreting) is not by trying to interpret the end results of what you were attempting to find, but rather by interpreting the process of the author’s thinking in and of itself. We believe that this is the appropriate way of pursuing philosophical research.

Keywords : Authentic Practice, Reading Academic Paper, Comparative Research, Thinking, Philosophy

## 1. はじめに

本共同研究は、教材研究において学校教師が複数の論文の読解を読み取る現実に即して、2つ以上の複数の論文を取り上げ、その領域における研究=学習の発展を読み取るには、どのように読解すればよいのかを究明するものである。その際、専門科学者の研究過程に着目し、それを「真正な実践（authentic practice）」として捉え直し、上記を検討する<sup>1)</sup>。

本稿は、その一端を担い、価値領域における哲学研究、その中でも、特に倫理学的内容に焦点を当てる。そして、そこから特性の異なる2つのタイプの研究を抽出し、それらを比較しながら、当該分野における研究内容の発展を読み取るための読解に関して、検討を加える。

哲学研究、特に倫理学的内容を扱う研究では、近年、以下の2つの研究の特性がみられる。1つ目は、生命倫理、医療倫理、環境倫理といった応用倫理学である。応用倫理学は、「20世紀後半に否応なしに人類に突き付けられてきた困難な問題に応じてたち起こった新しい学問分野」（工藤，2004，p. i）であり、「べきである」を追求する規範倫理学である。

2つ目は、そのような規範倫理学の領域に含まれる問題ではなく、むしろ、それらの問題の根となる問題に関心の対象としてきたのがメタ倫理学である（スミス，2006，p.4）。これは、応用倫理学が主流の今日、その前にきちんと議論すべきことがある、という主張でもある。

そこで、これら2つの特性から1つずつ典型的、代表的な著書を選択する。具体的には、工藤和男『いのちとすまいの倫理学』（晃洋書房，2004年）とスミス，M.著『道徳の中心問題』（樫則章監訳，ナカニシヤ出版，2006年）を対象とする。前者は応用倫理学の、後者はメタ倫理学の論考である。

先述したように20世紀後半から盛んに行われるようになった応用倫理学とその研究を

乗り越えようとするメタ倫理学の代表的な事例を取り上げ、比較することで、当該研究領域の研究内容の発展を解明することとしたい。

## 2. 本研究の方法

論文読解研究の研究プロセスとして、池野・福井（2015）が参考になる。池野・福井では、3つの読解パターンとその要点、そして、その段階をモデル化している（図1）。

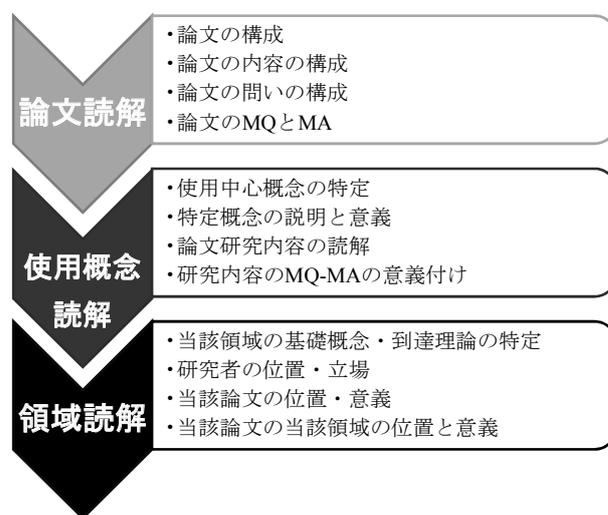


図1 3つの論文読解とその要点

※池野・福井（2015）より引用。

池野・福井は、論文の読解として、3つのタイプを設定し、その拡大過程があると捉える。それは、①論文読解、②使用概念による読解、③基礎概念のレトリック作用による読解である。（池野・福井，2015，p.4）

第一段階の論文（文章的）読解では、論文の構成、論文の内容の構成、論文の問いの構成、論文の主要な問いと回答（以下、MQとMAする）を軸に読解している（池野・福井，2015，p.4）。

第二段階の使用概念読解では、使用される中心概念の特定、特定概念の説明と意義、論文研究内容の読解、研究内容のMQ-MAの意義付けを読解している（池野・福井，2015，p.4）。

第三段階の当該領域の読解（基礎概念のレトリック作用による読解）では、基礎概念・到達理論の特定、研究者の位置・立場、当該論文の位置・意義、当該論文の当該領域の位置と意義を読解している（池野・福井，2015，p.4）。

本共同研究では、複数の論文を取り上げることが原則となっているため、それぞれの論文に関しては、このモデルを基本的な目安として読解分析を実行し、それらの結果を突き合わせながら、当該研究領域の研究における発展を比較考察する。

### 3. 論文読解－哲学書の文章読解

3では、『いのちとすまいの倫理学』と『道徳の中心問題』の2冊の哲学書を取り上げ、実際に読解を実行する。まず、それぞれの全体構成を概観する。その上で、1つの部（工藤論文）や章（スミス論文）に焦点化し、その構成と内容を読解し、概要を示す。次に、概要をもとに、問いを抽出する。そして、概要と問いをもとに、MQとMAを抽出する。

#### (1) 『いのちとすまいの倫理学』の論文読解

##### 1) 全体の概観

本稿で取り上げる1つ目の研究書『いのちとすまいの倫理学』は、以下のように構成されている。

はじめに

序論 倫理学の視点

第I部 いのちの倫理学

第一章 いのちが主人公

第二章 治すことの倫理

第三章 いたわりと自律

第四章 支えあういのち

第五章 いのちを生かす

第II部 すまいの倫理学

第一章 地球は我が家

第二章 住みよさの悪しき追求

第三章 共に生きる作法

第四章 すまいのしくみ

おわりに

本書は、「20世紀後半に否応なしに人類に突き付けられてきた困難な問題に対して立ち起った新しい学問分野」である「生命倫理や医療倫理、環境倫理と呼ばれる分野」に関して、「伝統的な倫理学の基本的な枠組みに戻って考える」というものである（工藤，2004，p. i）。

本書の全てを対象として読解することは紙幅の関係上難しいので、本稿では、本書全体を概観した後、今回は、上記で示した本書の特性を表す典型的な部として、第I部に焦点を当て、読解していくこととする。

本書は、大きく三部構成となっている。まず、序論「倫理学の視点」では、この後に続く2つのトピックを捉えるための倫理的視点が論じられている。この視点をもとに、第I部では「いのち」、第II部では「すまい」という2つの問題が検討されるというのが本書の大きな流れである。その際、第I部と第II部の第一章においては、どちらもその分野を倫理的に検討するための基本的な見方が扱われている。そして、第二章以降、具体的な内容が順を追って論じられている。

##### 2) 論文の構成と内容の読解

ここから、第I部に焦点化して検討していく。第I部は以下のように構成されている。

第一章 いのちが主人公

6 医療の本来の姿

7 現代医療の功罪

8 キュアからケアへ

9 自己決定の思想

第二章 治すことの倫理

10 脳死と臓器移植

11 不妊治療の問題点

12 実験としての先端医療

- 13 日本の医療制度
- 第三章 いたわりと自律
  - 14 超高齢社会の到来
  - 15 安楽死と人生の質
  - 16 人工妊娠中絶と優生思想
- 第四章 支えあういのち
  - 17 苦悩をかかえる人支える人
  - 18 障害と介護
  - 19 いのちを生み育むこと
- 第五章 いのちを生かす
  - 20 健康とよく生きること

第一章「いのちが主人公」は、もともと病と戦うのは「いのち」(患者自身)であり、医療は支援であったが、その前提が崩れ、医療任せになっていることを問題としている。そして、「主人公は他者から支えられて成り立つ自分のいのちであって、自己決定とは自律的にその声に耳を傾けることなのではないだろうか」(工藤, 2004, p.46)という医療を倫理的に検討する際の視点を示している。

第二章「治すことの倫理」は、「脳死と臓器移植」「不妊治療」「先端医療」「日本の医療制度」といった現代医療では、「治るいのちという原点を忘れて外から力を加えて治すという傲慢な思い違いが隠れている」(工藤, 2004, p.75)ことが問題であると指摘している。

第三章「いたわりと自律」は、「安楽死」と「人工中絶」というケアに関する問題を取り扱い、死の自己決定という判断の難しい状況に対する医学的規定や法定整備といった社会のしくみをつくることの必要性を主張している。加えて、「人工中絶」の問題では、フェミニズムの観点からその問題を捉え直す必要性に関しても述べている。

第四章「支えあういのち」は、病の患者や性同一性障害者などの苦悩をかかえる人々と看護師などのそれを支える人々、障害者、高齢者とそれを支える介護、産婦とそれを支える医療、子どもとそれを支える親といった支

えあう生き方を取り扱っている。そして、支えあいに関して、「できるときに役に立とう、もうすでにどこかで気づかない内に世話になっているから、と考える」(工藤, 2004, p.115)ことによって、それが回りまわってつくられるものであることを示している。また、それが社会を変えていくと主張している。

第五章は「いのちを生かす」は、健康に関して論じている。ここでは、健康を社会によってつくられた規範であると捉え、心身の状態に関わらず、「自分の「よく生きたい」の方向に向かっているのなら、いのちを生かしているのであり、健康である」(工藤, 2004, p.128)という視点を示している。

### 3) 論文の問いの読解

以上で示してきた各章の概要を問いに対する答えとして捉え、それに対応する問いを抽出した。各章の概要から見い出される各章の問いを示すと次のようになる。

- 第一章 「いのち」をどう考えるべきか
- 第二章 現代医療の問題とは何か
- 第三章 死の自己決定にどう対応すべきか
- 第四章 支えあう生き方とは何か
- 第五章 健康をどのように捉えればよいか

次に、MQとMAを読み取る。工藤は、「倫理的に考えるときの基本はあくまでも「よく生きる」ことであり、つねにそこに戻って考えるべきである」(工藤, 2004, p.4)とし、第I部においても、検討の対象となる問題状況を変えながら、我々がどのように判断をするべきなのかを繰り返し論じている。

したがって、第I部全体のMQとしては、「我々は「いのち」にまつわる問題についてどのように判断すべきなのか」とまとめることができる。そして、これに対するMAとして、我々の人生の主人公は「他者から支えられて成り立つ自分のいのち」(工藤, 2004,

p.46)であり、社会的に作られた規範だけに従って判断する必要は無いこと、他者の「いのち」もまた別の人生の主人公であればこそ、他者を助けるのではなく助かろうとする他者を出来る限りで支えるという判断をすべきである、ということである。このことが示されているのが第I部なのである。

## (2) 『道徳の中心問題』の論文読解

### 1) 全体の概観

本稿で取り上げる2つ目の研究書『道徳の中心問題』は、以下のように構成されている。

- 第1章 道徳の中心問題とは何か
- 第2章 表出主義者の挑戦
- 第3章 外在主義者の挑戦
- 第4章 動機づけに関するヒューム主義の理論
- 第5章 規範理由に関する反ヒューム主義の理論
- 第6章 道徳の中心問題はいかにして解決されるか

本書は、道徳の中心問題のような「メタ倫理学の表面の真下にある深刻な諸問題に哲学者たちがあまり注意を払っていない」(スミス, 2006, p. iv) こと自体を問題とし、「そうした問題に人々の注意を向けること」(スミス, 2006, p. iv) に主眼を置くものである。つまり、「道徳判断とは何か、それはどうあるべきか」という哲学者の主張に対し、「その「べき」とはどういう意味をもつのか」という問いを立てることにより、スミス自身も「道徳判断とは何か」を探究するという内容となっている。

工藤論文と同じく、本稿では、本書の全てを対象として読解することは紙幅の関係上難しいので、全体を概観した後、上記で示した特性を表す典型的な章として、第2章に焦点を当て、読解していくこととする。

本書は、6章構成となっている。まず、第1章では、「彼(スミス)が「道徳の中心問題」

と呼ぶものを提示することによってメタ倫理学上の主要な三つの争点を明らかに」している(スミス, 2006, p.289)。三つの争点は、以下のようなものである(スミス, 2006, p.18)。

- 一 「私がすることは正しい」という形態の道徳判断は、客観的な事実のことがら、すなわち、この判断を下す主体にとってなすべき正しい行為に関する事実のことがらに関してその主体がもつ信念を表す。
- 二 ある人が、自分がφすることは正しいと判断するならば、他の条件が等しければ、その人はφするよう動機づけられる。
- 三 行為者が一定の仕方で行うよう動機づけられるのは、その行為者が一組の適切な欲求と目的一手段に関する信念とを持っている場合に限られるが、信念と欲求とは、ヒュームの言葉で言えば、別個の存在である。

第2章から第4章では、「それら(三つの争点)を機軸として今日のメタ倫理学がなぜあまりにも多様であるのか、そして道徳の中心問題がこれまでどのように解決されてきたのかを簡潔に述べた上で、従来のメタ倫理学説を批判」している(スミス, 2006, p.289)。そして、第5章と第6章では、その批判を踏まえながら、「『道徳の中心問題』に対する彼独自の解決法」を与えている(スミス, 2006, p.289)。

### 2) 論文の構成と内容の読解

ここから、第2章に焦点化して検討していく。第2章は以下のように構成されている。

- 1 記述主義対表出主義
- 2 記述主義者が直面する一見明白なジレンマ
- 3 非自然主義に対するエアの批判
- 4 非自然主義と認識論
- 5 自然主義に対するエアの批判
- 6 〈未解決問題の論法〉と形而上学的自然主義

- 7 〈未解決問題の論法〉と定義的自然主義
- 8 道德概念にまつわる常識的真理とはどのようなものであるか
- 9 主観的な定義的自然主義対非主観的な定義的自然主義
- 10 道德概念のネットワーク分析への探究としての定義的自然主義
- 11 いかにしてネットワーク分析に欠陥が生じるのか—置換問題—
- 12 道德の用語のネットワーク分析は可能か
- 13 エアのジレンマは回避可能か
- 14 要約と今後の展望

本章は、表出主義者の議論を概説し、それに対する反論を試みているというものである。具体的に言えば、表出主義者（ここでは、A・J・エアを指す）は、記述主義が成り立たないことを論証することによって、その正当性を論じており、そのような記述主義に対する表出主義者の反駁を検討することによって、表出主義者への反駁を試みている。なお、表出主義とは、道德判断はそれをする人の承認や拒否といった態度を表出するとする立場であり、記述主義とは、道德判断は事実を述べているとする立場である。この対立構造を明確化しているのが「1 記述主義対表出主義」である。

この表出主義者の記述主義に対する反駁は、倫理学の理論家は誰でも倫理の用語に意味を与えようとしているが、その分析は道德判断の持つ見かけ上の記述的性格を保持していなければならないという前提に立つ限り、ジレンマに陥るというものである。そのジレンマとは、以下の2点である。第一に、「道德判断が自然主義的な事態を記述している」と主張すれば、それは自然主義的誤謬を犯すことになるというものである。表出主義者は、自然主義を主観主義と功利主義の2つに分け、さらに、主観主義を一人称主観主義と一般的主観主義に分け、検討し、それら全てが自然主

義的誤謬を犯すと説明している。第二は、「道德判断が非自然主義的な事態を記述している」と主張すれば、論理実証主義の諸原理を犯すことになるというものである。表出主義者は、道德判断が非自然的主義的なものとする、直感主義を採用することとなり、それは検証不可能なものであるという見解を取らざるをえない説明としている。このように、表出主義者の記述主義に対する反駁を説明しているのが、「2 記述主義者が直面する一見明白なジレンマ」である。

このような表出主義者の記述主義に対する反駁に対して、まず、非自然主義に対する議論を検討する。ここでは、非自然主義者は、彼らが措定する特別の性質と自然的性質との関係に関する知識がどのようにして獲得されるかを説明できていないということを証明している。それが「3 非自然主義に対するエアの批判」と「4 非自然主義と認識論」である。

次に、自然主義に対する議論を検討している。ここでは、表出主義者の定義的自然主義への批判とその際に用いる未決問題の論法に対して、形而上学的自然主義への退却と定義的自然主義の擁護という2つの戦略によって反駁を試みている。そして、表出主義者の自然主義に対する反駁は、検討したものについては妥当であるとしながらも、あらゆる形態の自然主義に対してただ一つの反論を加えているに過ぎないとし、それらを全て退けている。それが「6 〈未解決問題の論法〉と形而上学的自然主義」「7 〈未解決問題の論法〉と定義的自然主義」「8 道德概念にまつわる常識的真理とはどのようなものであるか」「9 主観的な定義的自然主義対非主観的な定義的自然主義」である。

以上の議論を踏まえ、記述主義者は道德判断とは何であるかをどのように記述すればよいかということ、2つの選択肢を通して検討している。第1の選択肢は、道德の概念は自

然主義的な用語によって徹底的に明示的で還元的なネットワーク型の分析を与えることが可能なため、道徳判断はものごとのあり方を何らかの自然的な観点から記述しているというものである。しかし、この選択肢は、置換問題にさらされやすいという問題点を孕む。それが「10 道徳概念のネットワーク分析への探究としての定義的自然主義」「11 いかにしてネットワーク分析に欠陥が生じうるのか—置換問題—」である。

第2の選択肢は、ネットワーク分析は不可能であるが、道徳の概念は自然的特徴を指示しているので、道徳判断はものごとのあり方を何らかの自然的な観点から記述しているというものである。しかし、この選択肢は、道徳的なことにまつわる常識的真理のすべてを捉えることができないという問題点を持つ。それが、「12 道徳の用語のネットワーク分析は可能か」である。

結論として、道徳概念の分析が必ずしも明示的で還元的な分析をする必要はないとし、道徳の概念に関する要約型の非還元的な分析、つまり、客観性、実践性、随伴性、実質及び手続きに関する常識的真理を適切に捉える分析の必要性と可能性を示唆する。それにより、表出主義者の記述主義への反駁を退けている。それが、「13 エアのジレンマは回避可能か」「14 要約と今後の展望」である。

### 3) 論文の問いの読解

以上で示してきた各節の概要を問いに対する答えとして捉え、それに対応する問いを抽出した。各節の概要から見いだされる各章の問いを示すと次のようになる。

- 1 記述主義と表出主義の論点争点は何か
- 2 表出主義者の記述主義者への反駁はどのようなものか
- 3・4 非自然主義に対する表出主義者の反駁は妥当なものか
- 5-9 自然主義に対する表出主義者の反駁は

妥当なものか

- 10・11 道徳概念のネットワーク分析は可能か
- 12 道徳の用語のネットワーク分析は可能か
- 13・14 表出主義者が提示する記述主義者のジレンマは回避可能か

次に、MQとMAを検討する。本書全体の概要でも示したが、スミスは、本書を通して、「道徳判断とは何か」を探究していた。第2章はその一環として、道徳判断は事実を述べる役割を果たし得ることを証明し、「道徳判断とは何か」に答えようとしている。したがって、第2章でのMQは、「道徳判断は事実を述べているのか」とまとめることができる。そして、これに対するMAは「道徳の概念の分析は還元的でなければならないという思い込みを排除するならば、「道徳の概念に関する要約型の非還元的な分析——道徳判断が一種の記述的な判断であることを確かに立証する分析——を与えることができるだろうという見込み」(スミス, 2006, p.78)があり、道徳判断は事実を述べているのだということを否定する必要はどこにもない」というMAが示されているのが第2章である。

## 4. 使用概念読解—哲学書の構造の読解

3において整理した概要を念頭に置き、見出した各章(工藤論文)・各節(スミス論文)の問いに着目して、各問いが論文全体でどのような役割を果たしているかということそれぞれの論文において検討する。

### (1)『いのちとすまいの倫理学』の使用概念読解

「第I部 いのちの倫理学」の各章の問いとその答えは、以下の図2のように倫理的視点の設定と倫理的視点を踏まえた「いのち」にかかわる現代的な諸問題の考察の2つによって構成されている。

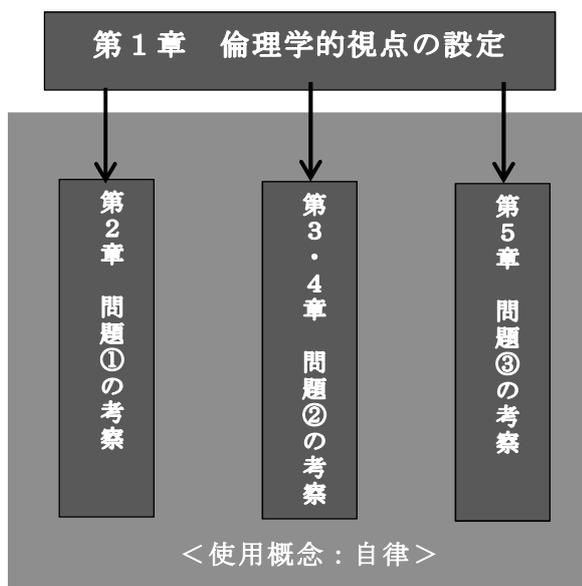


図2 「第I部 いのちの倫理学」の構造

※筆者作成。

この研究の中心概念は、倫理的視点として設定されている「自律」である。「自律」とは、「行為を生む意志が他人にも自然な心の流れにも動かされずに自分だけでこうしようと決断する」(工藤, 2004, p.18) ために「外からのルールや自分の欲望を否定するのではなく、それらを吟味し、選択する」(工藤, 2004, p.18) ことである。第I部では、この「自律」という観点を用意することで、現代の医療の現場における「治療」に関する判断について、患者の他律的な現状を見過ごすべきでないこと、人間相互の「ケア」に関する判断について、相互の自己決定に従って、可能な部分を支えあうべきであること、「健康」に関する判断について、社会の作った健康の規範に従うべきでないことを示している。

「自律」とは、自分のことを自分できるということであり、工藤の研究で目指されている「よく生きる」ことを意識的に行っている状態を意味する。すなわち、それは我々がその都度行う判断全ての根幹となりうる理屈である。工藤の研究は、この概念を使用するこ

とによって、現代社会において、我々が直面する問題に対して判断していく指標を作り出そうとしているのである。この点が、工藤の研究の意義であると言える。

## (2) 『道徳の中心問題』の使用概念読解

「第2章 表出主義者の挑戦」の各節の問いとその答えは、以下の図3のように構成されている。まず、①表出主義の反駁の確定である(1論点・争点, 2表出主義者の反駁)。具体的には、記述主義は自然主義と非自然主義に大別できるが、どちらもジレンマに陥る、というものである。次に、②表出主義の反駁に関する妥当性の吟味である(3・4 非自然主義者, 5-9 自然主義)。具体的には、非自然主義と自然主義への反駁を吟味し、後者への反駁を退けている。しかしそれは、自然主義的な記述は不可能ということを否定しただけで、それを可能にして見せたわけではない。そこで、③自然主義的な記述の方法の検討が必要となる(10・11 道徳概念, 12 道徳の用語)。具体的には、道徳概念(10・11

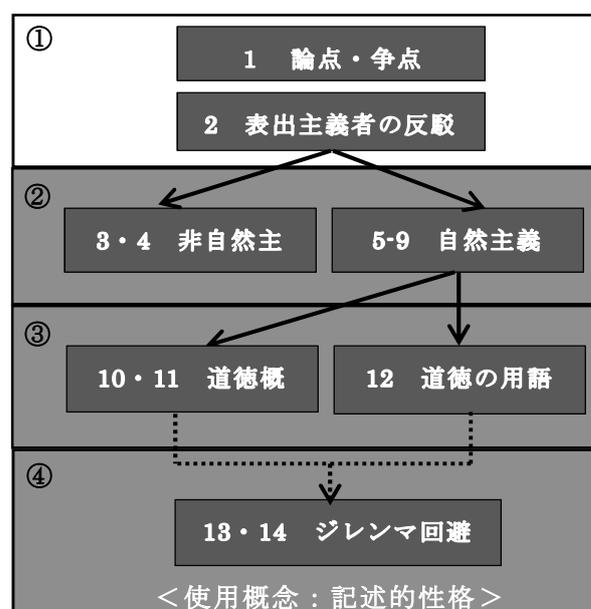


図3 「第2章 表出主義者の挑戦」の構造

※筆者作成。

道徳概念)と道徳の用語(12 道徳の用語)のネットワーク分析を検討し、どちらも問題を孕んでいるという結論に至る。その結果、上記の2つではない、④第三の方法によるジレンマ回避の可能性の考察が行われる(13 ジレンマ回避)。第三の方法の具体に関しては、本稿3-(2)-2)を参照されたい。

この研究の中心概念は、「記述的性格」であり、これを再検討することによって、表出主義者の「道徳判断とは何一つ事実を示したものではない」という主張を否定する。スミスの研究は、我々が使う「しかじかするべきだ」という道徳の使用は、どのような意味を持っているのかを探るものである。スミスは、表出主義者の道徳の意味に関する探究において、前提されている「記述的性格」という概念を再吟味することで、その探究の結論が必然ではないことを示していく。

「記述的性格」とは、そのものが事実を述べているのかどうかということであり、厳密に言えば、そのものが「この世界がほかのあり方ではない」という意味を含んでいるかどうかであり、ということである。道徳の記述的性格をどのように捉えるかは、我々の使用する道徳の意味を強く決定づける。なぜなら、記述的性格とは、言い方を変えれば、そのものが真偽を判断できるものかどうかということであり、我々がそれを分析と正当化によって共有できるかどうかを決めるものだからである。

スミスの研究は、我々が「しかじかするべきだ」と言うことの意味を探るために、それにほとんど深刻に考えるような意味などないという主張を取り上げ、それを強く導いている前提を再吟味することで、反対に意味が作り出せる見込みを作り出している。このようにして、「しかじかするべきだ」と言う行為について議論される基盤を作っているのである。この点がスミスの研究の意義であると言えよう。

## 5. 領域読解—哲学書の位置の読解

本章では、論文読解と使用概念読解を踏まえ、2つの研究書を比較しながら、それらの構造に組み込まれているレトリック、その論文を成り立たせている認知構造を解明する。

工藤の研究は、「自律」という概念を使用することによって、現代社会において、我々が直面する問題に対して判断していく指標を作り出そうとするものであった。つまり、「我々が行動する際の指針は何か」を追求するものであり、「行動についての思考」である。

一方、スミスの研究は、我々が「しかじかするべきだ」と言うことの意味を探るために、それにほとんど深刻に考えるような意味などないという主張を取り上げ、それを強く導いている前提を再吟味することで、反対に意味が作り出せる見込みを作り出していた。つまり、「我々が行動する際の指針は何か」を追求する研究者の指針は何か」という工藤の研究よりメタレベルを一つ上げたものであり、いわば「思考についての思考」である。

以上のように、工藤とスミスの研究の比較から「行動についての思考」と「思考についての思考」という2つのレトリックがみて取れる。つまり、それは思考のメタレベルの差異である。

では、上記のことは何を意味するのか。それは、メタレベルを上げることによって、表面上現れていた問題をより深く探り、これまで研究の対象外だったさらに深刻な諸問題を露出させ、我々が吟味可能な範囲を広げている。哲学研究の目的を本質的問題への新しいアプローチを創出することであると考えれば、スミスの研究は、新しい問題を掘りだし、その吟味の可能性をより広げるための研究の発展と捉えることができると言えるのではないだろうか。

## 6. おわりに

本稿で行った比較考察の結果，哲学研究における読解方法として，探究した結果を読み取ろうとするのではなく，その思考のプロセスを読み取ることによって，その領域における研究＝学習の発展を読み取ることが可能になることが示された。

哲学研究の成果を教師が授業にそのまま持ち込む機会はずがないであろうし，持ち込んだとしても，それを教育目標や内容に落とし込むことは非常に困難なことであろう。しかし，本稿で示した読解のように，哲学研究の成果を哲学者の思考，もしくは，思考過程と捉えることで，学習をより有意性のあるものとするのできるのではなかろうか。

## 註

1) 学習科学において，「真正な実践」とは，「ある領域の研究者と似た活動に従事することで生徒は深い知識を学ぶ」（ソーヤー，2009，p.3）こととされている。それを踏まえ，池野・福井（2015）が，専門研究者の論文読解を通して，「真正な実践」を再構成するための仮説を提示している（p.4）。それを以下に示す。

- ①研究者にも「学び」がある，
- ②研究者の学びは，研究論文の読解を通して，再生可能である。
- ③その再生は，
  1. 論文そのものの読解，
  2. 執筆者の使用する基本概念，理論による読解，
  3. その学問領域の基本概念，到達理論による読解，
 の3段階として可能である。
- ④研究者の学びの再生が，真正な実践を作り出す。
- ⑤真正な実践は，研究者の学びを学習者の学びに変換することである。

## 参考文献

- 池野範男・福井駿（2015）「「真正な実践」研究入門－価値(哲学)領域の読解を事例にして－」『学習システム研究』（2），pp.1-10。
- 工藤和男（2004）『いのちとすまいの倫理学』晃洋書房。
- スミス，M.著（樫則章監訳）（2006）『道徳の中心問題』ナカニシヤ出版。
- ソーヤー，R.K.編（森敏昭・秋田喜代美監訳）（2009）『学習科学ハンドブック』培風館。

## 著者

岡田 了祐 広島大学大学院教育学研究科  
福井 駿 岐阜工業高等専門学校